「レプリケイト」

―２稿―

2025/3/2

雨森　れに

〈人物表〉

瀬間　なみ　（３２）　会社員。マニュアル人間。
田中　希未　（２５）　なみの後輩。流行り物がすき。
渡辺　智子　（２５）　なみと同じ部署。関りが少ない。

〈ログライン〉

なみが希未を真似し、希未に逃げられたため、新しいターゲットを見つける。

〈テーマ触媒〉

光と影
光（普通）になりたがる影（マニュアル人間）という解釈で使用。

〈テーマ／フック〉

マニュアル人間／真似

1.

会社・オフィス（昼）

シックなパンツスーツの瀬間なみ（３２）。
プリンターから印刷物を取り出す。
自席に戻り、隣の席の田中希未（２５）へ。
希未はフェミニンなオフィスカジュアルを着ている。

なみ　「はい。書いてある通りにすれば間違えないから」
希未　「やっぱりこの作業、マニュアルあったんですね！　先輩に相談してよかった～」
なみ　「ふふ。希未ちゃんに頼られると悪い気しないんだよねぇ」
希未の隣の席に座る、渡辺智子（２５）はもくもくと作業している。

2.

アパート・室内（夜）

壁一面の本棚に啓発本が並ぶ。
ハンガーラックには昼間着ていたスーツ。
床に雑誌が散らばり、マルがついたページが見える。
うち一つが昼間のスーツ。
なみがテーブルにファッション雑誌を広げ、口紅にマルをつける。

3.

会社・女子トイレ・パウダーコーナー（昼）

前日と同じスーツ姿のなみ。化粧直しをしている。
暗いブラウンカラーの口紅を塗り、不機嫌そうに眉根を寄せる。
希未が入ってくる。服装は白のブラウスに灰色のフレアスカート。
希未はなみの手元を見て顔を輝かせる。

希未　「先輩、それ新作じゃないですか～」
なみ　「さすが、チェックしてるねぇ。でも、色失敗しちゃって」
なみ、口紅を拭う。
希未　「言われてみればちょっと暗いですかねー？　タッチアップしました？」
なみ　「ううん。休憩中に急いで買ったからさ」
希未　「なるほど……手首、見せてくれますか？（手首の血管を

見る）多分私と同じブルベ夏ですよ。ちょっとこれ使ってみてくださいよー」
希未がミニ口紅を渡す。
なみ「え、なにこれ小さい」
希未「これのおまけでついてたやつです」
希未、通常サイズの同じ口紅を取り出して見せる。
希未「使ってないんで、よかったらどうぞ。私とおそろっちしましょ～」
なみ「（笑って）若者と同じとか似合うかなー」
なみ、口紅をつける。落ち着いたローズカラー。
驚いたように固まって、鏡を見つめる。
希未も鏡を覗き込む。
希未「え、めっちゃ似合う。やっぱ私と同じブルベ夏、確定じゃないですか～」
驚いたように頷くなみ。
希未と鏡を交互に見る。
そのうち、鏡に夢中になり、笑顔になったり唇を突き出したりと表情を変える。
希未「せ、せんぱい？」
なみ、鏡を見つめたまま真顔になる。
なみ「そう、だね。うん。同じかも」
希未「で、ですよねー。実際に試すって大事ですよー」
なみは鏡から目を離さず、無言で唇を撫でている。
希未「えっと、私、先戻りますね？」
希未がその場を離れようとする。
なみ「待って」
なみ、鏡から目を離し、希未をじっくり観察する。
なみ「使ってる化粧品、全部教えてもらってもいい？」

4.

アパート・室内（朝）

雑誌の上に散乱するショップ袋。
テーブルには新品の化粧品が並ぶ。
なみ、昨日の希未と同じブラウスを身に着け、鏡の前に立つ。

スマホを取り出し、鏡と見比べる。
画面には希未のインスタ。写真と同じポーズをする。

5.

会社・女子トイレ・パウダーコーナー（朝）

希未　「先輩？」
　鏡を見ていたなみが振り向く。
　なみは昨日の希美と全く同じメイクと服装。
なみ　「あ、おはよう」
　希未、なみの姿を見て戸惑う。
希未　「え、なんで？　どうしてですか？」
なみ　「希実ちゃんが教えてくれたんじゃない」
希未　「え？」
なみ　「私たち、同じだって。大丈夫。ちゃんと試したし」
　なみが嬉しそうにブラウスを撫でる。
なみ　「そうそう、スカートも同じ店だったんだね」
希未　「うそ……信じらんない……」
なみ　「そんなこと言わないで。おそろっち、しようよ」
　なみ、インスタと同じポーズをしてみせる。
　希未は一瞬考えて、口元に手を当てる。
　なみ、希未の爪を見て、
なみ　「ネイル、いいよね。私もやってみようかな。あ、インスタに写真あったよね？」
　スマホをすぐに取り出し操作する。
希未　「インスタ……先輩に教えてないですよね……」
　なみが顔を上げる。
なみ　「これはサブ。実際見たほうが確実でしょ？」
希未　「私じゃなくても……」
なみ　「（声を荒げて）だって同じだって言ったじゃん！」
　なみが鏡を殴る。
なみ　「同じなのに何でアンタだけ」
　希未が硬直する。
　なみは鏡を殴り続ける。
なみ　「部長も課長も、みんな田中を見てやってくれって……私が27の時は誰も助けてくれなかった。マニュアル投げ

つけてくるだけだった」
一層強く殴りながら、
なみ「放置されて。聞いても無視されて。失敗したら笑われて」
なみは殴るのをやめて、希未を見る。
希未、一歩あとずさる。
なみは逃すまいと一気に距離を詰め、希未の腕を掴む。
なみ「知ってる？　マニュアル通りにできないと社会不適合者なんだって――だから」
顔を近づけ、耳元で、
なみ「次は希未ちゃんの喋り方、教えてよ」
逆の手は優しく希未の髪を撫でようとする。
希未「イヤァ！」
希未は振りほどこうともがくが、びくともしない。
なみが、悲しそうな顔で希未を見つめる。
なみ「……私も、イヤって言えればよかった」
なみ、希未から離れる。
なみ「あとでちゃんと教えてね」
希未、一拍置いてハッとしたように逃げ出す。
なみは追いかけず、鏡を見る。
希未の顔を思い出すように、恐怖に染まった表情を作る。
なみ「『イヤァ！』」
なみは満足げに、鏡を撫でる。

6. 会社・オフィス（朝）

なみがトイレから戻る。
フロアはざわざわとした様子。みな、なみを見てひそひそとする。
なみは気にせず自席へ。
自席の周りは誰もおらず、ふたつ隣の席の智子だけいる状態。
希未へ電話をかけるが、出ない。
智子に焦ったように声をかける。

なみ　「ねぇ、希未ちゃん、いるよね？」
智子　「し、しらないです」
なみ、舌打ち。
再度電話をかける。
なみ　「あ、希未ちゃん？　私まだマニュアル貰ってないけど。
あれ？　留守電？　え？　どこいったの？」
なみはデスクに突っ伏し、指でこめかみを押さえる。
智子、ためらいながら、
智子　「マニュアル、持ち帰られちゃったんですか？　あの、よかったら手伝いましょうか？」
なみは顔をあげ、
なみ　「ほんとに……？」
縋るような眼差しで智子を見つめ続ける。
そして、唐突に手鏡で自分を見る。
なみ　「（ゆっくりと）ねぇ、渡辺さん」
智子　「は、はい」
なみ　「もしかして……ブルベ夏？」
なみが智子の髪に手を伸ばす。
智子　「（困惑して）え？　あ、ちがうと思います」
伸びた手が寸前で止まる。
なみ　「……そう？　でも、大丈夫だよ」
少し笑って、智子の髪を撫でる。

おわり